

松 山 大 学 論 集
第 23 卷 第 1 号 抜 刷
2 0 1 1 年 4 月 発 行

薬学史の時代区分に関する研究(2)

—— 豊後中世における別府温泉の

保健医療関係誌をもとにした考究 ——

牧

純

薬学史の時代区分に関する研究(2)

—— 豊後中世における別府温泉の

保健医療関係誌をもとにした考究 ——

牧			純 ^{*)}
坂	上		宏 ^{**)}
関	谷	洋	志 ^{*)}
玉	井	栄	治 ^{*)}
鳥	居	鉦 太 郎	^{***)}
大	内	裕	和 ^{****)}

要 約

松山大学における薬学史教育では、薬学の発展段階の理解を徹底させるべく、種々の検討を行っている。そのための作業仮説，“薬学史における薬に関する3つの発展段階「信心→経験→科学（化学）」を設定して、その当否を多種多様の範囲で個々のケースについて調べている。例えば、「抗生物質」開発なら“信心”はなく、当然“科学（化学）”中心であろう。それが「温泉水」ならどのようなであろうか？ 検討対象のひとつとして、別府温泉利用の医療誌と医療史とに着目する。日本国内の他地域にも例があるように、別府温泉も既に江戸時代、医療目的で使われていた。それは、本格的な「化学」の導入前のことで「経験」的ではあるが、現在の我々から見ても合理的であった。今回、今

*) 松山大学薬学部感染症学

**) 明海大学歯学部病態診断治療学薬理学分野

***) 松山大学経営学部（現 中央大学経済学部）

****) 松山大学人文学部社会学科（現 中京大学国際教養学部）

日的価値のある医療利用が何世紀まで遡れるかの観点から、定説となっている事蹟の時系列的検討を試みた。すなわち中世における発展段階としての「信仰」と長年の「経験」の蓄積に基づいた別府温泉利用の医療誌につき、AD13-16世紀の天災、信仰、統治に関する史料、成書を中心に、以下の如く考究した。

第一に、豊後（現在の大分県）において、鎌倉新仏教のひとつである時宗の布教活動の側面より温泉医療史に触れる。13世紀後半には一遍上人（1239-1289）が別府に遊行し、瀬戸内海西部地域で既に行われていた石風呂の手法を別府鉄輪の温泉湯煙に適用し、健康増進のための温泉利用の方法を広めた。第二に、大友家統治の関係から、温泉に関するアプローチを図る。大分県では、鎌倉時代に始まって戦国末期までの時代、すなわち中世は、しばしば「大友時代」と言い習わされてきた。しかし、この時代の残っている文献は極めて乏しい。わずかな知見からの推測となるが、大友家が温泉を重視していたのは確かなようである。13世紀後半は博多の元寇防衛に出陣した武士たちが戦傷を養う場として別府温泉が使われたといわれる。温泉の整備、薬師堂開設、温泉奉行命名などの可能性も示唆されているが確証はない。16世紀末には、大地震などが原因で別府湾にかなり広く存在した砂地の陸地が海に没し、豊後に君臨してきた守護大名も、九州における“関が原の戦い”（石垣原の戦い）に敗れて再興の夢虚しく没した。そして温泉医療利用も新しい時代の局面を迎える。

本研究の結論は次のとおりである。別府地域の人々が古代より温泉に期待を寄せて「薬師如来」に祈願してきたことに例証される「信心」ないし「信仰」に基づいた“医療”の世界が、現在のように、科学中心の温泉医療の時代へと推移するまでには、「経験」蓄積の要素が「信仰」に混ざった時代があった。すなわち、「信仰」に累積した「経験」が加わった時代を経て「科学（化学）」の時代に移行するという全体の流れのなかで、「大友時代」は過渡期としてとらえられよう。これまで考究した限りの別府（鉄輪）の温泉について、「経験」に基づいた医療利用は少なくとも13世紀後半迄は遡れると判断された。別府

温泉の医療利用の歴史にも、「信心」に始まる「信仰」を経て長年のノウハウである「経験」の要素が加わり、現在のような「科学（化学）」の時代に至る発展段階が認められそうである。但し、前者から後者の時代へと截然と推移したわけでは勿論ない。時代の推移とともに次第に後の「段階」の割合が多くを占めるようになった。例えば現代でも、「温泉信仰」は行われている。科学的根拠は未解明ながらも「経験」的によいとされることすら見受けられる現在において、科学的（化学的）な温泉利用が中心となっているのである。

[キーワード：薬学史，時代区分，温泉水，別府温泉]

SUMMARY

Studies on the classification of ages in the history of pharmacy were carried out. The present author's idea of the 3 developmental stages of pharmacy, "belief", "experience" and "sciences" had to be checked in many examples. Exemplification through the history of pre-clinical utilization of hot spring spas based on "belief" and "experience" during the ancient and medieval periods in Beppu, Oita Prefecture, Japan has been tried as follows.

Balneological studies on ancient and medieval ages in Beppu city were carried out based on old documents. Natural history of hot springs sometimes described there shows that people were so afraid of disasters that they worshiped before them as an angry of the deity. In the meanwhile they expected welfare after their worship of hot springs. For instance, they would play an important role in their fighting against demons. Our studies show that hot springs in Beppu were useful in the maintenance of their desired healthy life. During the Edo era, spas were utilized for the treatment and prevention of infectious and parasitic diseases in Beppu. What the situation for this purpose before the Edo era was intrigues the present authors so much. Our historical study shows that medical and medicinal

utilization of the spas, through the inhabitants' experience and influenced by the lesson by a famous priest named Ippen-shonin, might go as far back as in the late of the Kamakura era (the latter of the 13th century), before when people worshiped the spas in belief without having the chance of listening to any preaches on their excellence.

The hypothesis of the 3 developmental stages of pharmacy above mentioned was corroborated through the present studies on the ancient and medieval history of pre-clinical utilization of hot spring spas in Beppu.

[key words : pharmaceutical history, historical development, hot spring, Beppu City]

目 的

本論文執筆の目的は、松山大学薬学部で行われている講義「薬学史」における時代区分のあり方を考究することにある。将来にわたって、個々の医薬品につき吟味してゆく計画において、今回は「温泉」を伝統的な薬と見て、考察する。定説となっている歴史的な事蹟に関する成書の記載を中心に、薬学史の時代区分に関する論考を進める一助となることを願う。諸先生方のご意見を賜われることにより授業改善の機となれば幸いである。

緒 言

人類の歴史には、これまで主として政治経済の視点より区分された時代名が用いられることが多い。しかし「医学・医療・看護の歴史」「社会と薬の関係の歴史」に関する時代区分となると、さほど容易ではない。医学・薬学、医療の時代変遷の古代から現代に至るまでに関していえば、各時代の教育と研究（教材研究を含む）において、確かに、奈良・平安・鎌倉・室町・江戸時代などといった区切りがよく用いられる。これには利便性があり、政治的な時代背景を示すものとして重要である。しかし、例えば明治維新と文明開化のように

重なることもあるが、政治的区切りは、本来医薬の発展段階そのものでは勿論ない。

日本内外の歴史における「医」と「薬」に関して、又別の適切な意義ある発展段階の時代区分が必要である。松山大学薬学部の「薬学史」の授業を担当している本論文の筆者のひとり（牧純）は薬の社会における役割とかかわりに関する通史の講義の完成を目指している。社会的背景、政治変遷を医薬の展開の背景として考慮に入れながら検討を続けているが、医薬そのものの時代区分に関しては更なる考究が必要である。とりあえず、筆者らは史的発展の3段階を仮定している。それによると「信心」→「経験」→「科学（化学）」の発展段階で薬学が展開したと教える。これは関係した方面においては誰も思い浮かぶことであろう。先例があるのではないかと想像される。しかし、種々調べてはいるが、これまでのところ、薬学史教育で実践されているこの3段階説は見当たらない。今後とも検索は継続する。同様なものでは次のものが見つかった。

イタリア人の医史学者ルチャーノ・ステルペローネはその著『医学の歴史（小川熙訳）』¹⁾の中で、医療の先史時代を3つに分けている。

- ① 病気に対して極めて本能的に立ち向かった考えられる対処方法—例えば熱が出たら水で冷やそうとすることや、傷を自分の唾液で舐めたりなどの「本能的医療」。
- ② 自分の体に何かが侵入して肉体を傷つけている目に見えない「悪霊」の仕業から何とか逃れようとする「魔術的・悪霊的・祭司的医療」。
- ③ 体験的に見出した有用な薬用植物による「経験的医療」。

これらはいずれも科学の時代以前のことであり、また大変興味深い見解である。本論文の筆者らは、これらから、直ちに次のことを想起する。色々な哺乳類に①が見られる。後述の温泉で傷を癒している鳥や鹿もこれに該当するであろう。②の具体例のひとつと考えられるのであるが、病気の“原因”を除こうとして、悪魔払いも大昔には行われた。例えば、汚いソックスを首の周りに巻きつけたこともあった²⁾。③では、人間ではないが（多分原始時代の人間も同様で

はなかったかと推測される), 例えば寄生虫に感染したチンパンジーが特定の薬用植物を口にしているのが自然界で観察されている³⁾。すなわちキク科の植物 *Vernonia amygdalina* をタンザニアの野生チンパンジーが薬用的に利用しているが、経験的に効くと記憶しているのであろう。その後、高橋友則ら (1996) によりこの有効成分が特定されている (日本農芸化学雑誌 70, 臨時増刊 p. 52)。

以上は先史時代に関する分類である。しかし本筆者らが常日頃考えているのは先史時代も含め現代に至るまでの3段階方法である。筆者らの仮説では①と②は「信心」の段階に含まれ、③は「経験」である。その後「科学 (化学)」の時代が続くと考えられる。

このような当然の考え方にもとづきたいわゆる“3段階発展”を薬学史教育の現場で行う根拠も大切である。それが妥当か否かについては諸分野の薬学、医薬品の歴史を一つ一つ綿密に考証しなければならない。すなわち、信心 (または迷信)→経験→科学 (化学) の段階的発展が妥当か否かの判断には、種々の事例研究が必要である。この点を種々の病気と医薬品について検討したい。

温泉入浴は薬学の教科書では、普通取り上げられてないが、温泉水を民間療法の「薬」に比較相応可能なものとみて、論考を進めたい。この温泉医療の歴史であれば、「信心」または「信仰」、一般の人々による長年の日常「経験」、近代現代の「科学 (化学)」 (分析化学、生理学等) などが時代区分の候補となろう。人々の日常利用の結果として「経験」的に、“医療的” 価値が伝承されるようになった温泉もあるかと思われる。温泉水の化学的分析の出来なかった時代、温泉の価値はこのように認識され発展したのではないかと想像される。しかし検証が必要である。この論文では、古代における信心と薬師如来信仰に続き、別府温泉 (大分県) の医療利用の歴史と健康温泉誌をひとつの例として紐解くことで、立証の準備を更に進めた。

別府温泉は国際的にもよく知られた温泉である。世界一の源泉数 (約 2,800 か所) と、日本一の湧出量 (約 13 万 6,000kl/日) を誇り、市内の至る所から湯気が立ち上る⁴⁾。湧出量に関して別府温泉を上回るのは、世界中の温泉地を見

渡してもおそらく米国イエローストンの温泉ぐらいであろう。しかし入浴使用量では、別府温泉の右を行くものはないのではなからうか。同温泉は、量的な規模のみならず、泉質の種類が多様なことも亦注目され、以前よりその医療的な効用に期待が寄せられてきた。

本論文では、医療目的の温泉利用が如何に行われていたかの視点より、中世又は大友時代（大分県地域を中心とした鎌倉・室町時代に相当）の別府温泉について考究した。その際「信仰」「経験」の具体的内容に注目した。残されている文献や史料はあまりに乏しい。現段階では、とりあえず次のように、2つの方面から温泉の医療利用を考究し、一応の結論にたどりついた。まず、別府鉄輪地区（大分県）における一遍上人による新しい仏教の布教活動に関連して論及した。次に、豊後の国（現在の大分県に含まれる）の統治に関する事柄について述べた。仮説の域を出ない部分もまだ残っているが、最後に考察と結語で本論文を締めくくった。今後の研究に繋げたいと考える。

材 料 ・ 方 法

検討した限り、中世の別府の温泉に関する文献史料は乏しいが、近現代の成書を通してアクセスした情報、新聞掲載の一次資料、比較すべき他県における記述を本文中で最大限活用しつつ、また関係の文献を出来る限り引用した^{1)~22)}。定説となっている事柄を中心に review する作業を通して、時代区分の考究を進めた。従って、大いに注目し引用したのは「成書」である。未だ定説となっていない一次史料は参考程度にとどめたが、一応引用する方針で臨んだ。例えば、入手しにくい日名子文書⁵⁾の記載も一応参考・引用としたが、今回はまだ原典に当たるに到っていない。これらの文書に当たる際、松山大学で行っている薬学史教育¹³⁾における、「迷信」「経験」「科学（化学）」の各時代のいずれに該当するかを常に考察した。ネット情報も検討した。年号の表記はすべて紀元後の西暦（AD）を用いた。本著者の一人、牧純は2009年11月20日、別府市鉄輪を訪問し、「永福寺」、「石風呂温泉」など関係のところを au（KDDI）の

W61Hで写真撮影し、本文中に掲載した。所謂「別府八湯」のひとつ、柴石温泉に「石蒸し風呂」の跡が残っていることも同日確認し、ビデオ撮影を行った。2010年1月1日には鉄輪の石蒸し風呂温泉に本論文の第一著者、牧純は自ら体験入浴し、その様子を簡潔に本文に記載した。

結 果 ・ 考 察

現在のような科学的な温泉医療の時代であっても、信仰の世界は信奉されている。温泉の医療利用が、これまでのような変貌を遂げるまでに、「経験と見聞」の要素が「信仰」に混ざった時代があったと考えられる。「信仰」から「科学」に直接移行するのではなく、その間に「経験」の時代、あるいはそれらが混ざった時代を経て、実践の薬学は進展していった可能性を考える。そして、「現在は科学の要素が多くを占めながらも、昔からの信仰と経験も生きている」と考えた。この考えは「薬学史」の講義で、牧らが教えているところである¹³⁾。これが温泉の医療的利用の歴史にも適用しうるか否かについて、この論文は考究しようとした。それは以下の事項で例証されると判断される。但し中世の別府温泉は記録に乏しい。古文書の内容に関する僅かな記述等^{4~12)}より、当時の様子の再現を試みた。定説となっているものを出来る限り引用した。多少とも残っているのは戦争、災害の記載、鎌倉新仏教の布教および大友家統治の関連で温泉を考えさせるものである。

I. 中世豊後の温泉利用に影響を及ぼした一遍上人の布教活動

別府鉄輪地域および周辺で「地獄」の現れのようにとらえられていた熱湯の温泉に健康上の価値を見出したのは、13世紀(1276年頃、一説に1275-1278年⁴⁾、別府鉄輪に遊行に來た一遍上人(いっぺんしょうにん)によるところが大きい。それは自らの瀬戸内地方における「経験と見聞」とに基づいたものであった。一遍上人(智真)は、愛媛県松山市にある「宝厳寺」(ほうごんじ、時宗、県史跡)で誕生し、民衆のなかに入り生活を共にしながら全国を遊行したとき

れる⁶⁾。教理よりも実行によって全国の民衆を教化したといわれる上人²²⁾の活動の舞台となった別府における様子は種々刊行物^{4,5,8,9,10)}に記されている。同上人は九州南部大隈地方から豊後に入り、大友氏の支援を受けたといわれる²¹⁾。その九州における布教活動の様子は『紙本著色遊行上人絵伝（しほんーちゃくしょくーゆぎょうしょうにんーえでん）』（国重文）に描かれている⁹⁾。それらの記載をもとに整理してみると以下ようになる。上人の一行が別府海岸に辿り着き、現在「上人ヶ浜」と呼ばれている海岸より上陸し現在の別府鉄輪の地域に至ったとの伝説が残っている。一遍上人は、前出の老人から温泉の効用に関する着想を得、それまでの瀬戸内地方の「経験と見聞」と併せて、体系的な温泉利用による健康増進を始めたのだった⁹⁾。これは多くの信者というか信奉者が支えとなって実行可能となったのであろうが、一遍上人こそ、鉄輪の価値を見出し、湯治場として整備し、石室の中で熱湯の蒸気により身体を温める「蒸し湯」を始めた人と伝えられる。それは瀬戸内海沿岸を中心とした石風呂の手法が取り入れられたとされる。所謂「洪の湯」「熱の湯」もスタートさせたといわれる⁹⁾。

今日に伝わる「蒸し湯」（写真1はその建物）は、経験の医療と見聞が生かされている。焼いた石に水を注ぎ、その蒸気に浴するタイプの石風呂からヒントを得たと想像される。別府鉄輪地区の豊富な湯煙は常時準備されている天然の蒸気である。本論文筆頭著者が2010年1月1日に体験したその方法は次のとおりであった。浴衣をまとして、薬草（その種名は未同定）が敷いてある石室に入る。天井は低いが、うつ伏せの姿勢となり、高温多湿の中で10分間の汗をかく。この後、別室の温泉風呂で汗を流す。勿論鎌倉時代のものとは違いが多々あるであろうが、基本となることは共通している。瀬戸内地方では海水で汗を流していたらしい。瀬戸内西部地域には今に伝わる石風呂の残っていることがパソコンネット情報でも解る。例えば、愛媛県では今治市桜井にその伝統が残っている。山口県では左波川流域や周防大島が密集地帯であり、今なおも稼動中のものがある⁷⁾。大分県内を見渡すと、別府鉄輪地区のような温泉場で



写真1

別府鉄輪に伝わる現在の石蒸し風呂。左右相称の造りで、左が男性用。

はないが、旧緒方町域には合計12基が確認されている。なかでも尾崎，辻河原の石風呂（1624-44 から19世紀後半まで利用）が有名である⁴⁾。このように日本式サウナ風呂が史跡として残っている。これらのルーツとか瀬戸内西部地域との関連についての研究も興味深いが、本論からそれるので引用のみにとどめる。因みに、別府鉄輪ではサラダ、鶏卵など「地獄蒸し」のメニューが伝わるが、「蒸し風呂」との関連は今後に残された興味深い課題である。

信奉されていたからこそ可能であったその内容は、もともとは瀬戸内の長い間の「経験」に基づくものであった。勿論「迷信」に基づくものではない。一遍上人の布教活動自体、「信仰」を広め、信者数を増やすことが目的であったに相違ない。しかし、「信仰」そのものの対象ではなく、健康によいと説いた「蒸し風呂」の効用は、それまでの「見聞」も含めて「経験」が基盤となっていることに注目したい。

鉄輪地区で温泉の効能を広めた一遍上人は現在でも地元の住民たちに尊敬され、毎年8月下旬に上人の徳を偲ぶ行事が催される⁹⁾。後述のように、同寺に安置されている一遍上人の木像が毎年秋の湯浴み祭り（ゆあゆみまつり）で湯浴

みにされたあとの湯に入浴すると、一風呂で千回入浴の効き目があるという信仰伝説が残っている⁹⁾。上人の「見聞」「経験」に基づいた鉄輪の温泉の再開発は言うまでもなく画期的な史実である。繰り返すが、決して「迷信」や単なる「信仰」がもととなった温泉健康法ではない。元来瀬戸内沿岸地方の人々の「経験」が土台となっているものである。

Ⅱ. 大友家の支配と別府温泉の利用

(1) 大友家の初代から3代まで一特に元寇の時代

大友氏の初代能直（よしなお）が源頼朝から豊後国守護に任じられた1196年以來、22代義統（よしむね）に至るまでのおよそ400年間（江戸時代の約270年間よりも遥かに長い）、大友氏は初代と第2代にわたる準備期間を経た後、豊後に大きな勢力を張った。以下の文章は特に断りのない限り、引用文献^{4,5,8,9,10)}をもとに review したものである。

この鎌倉時代に始まって戦国末期までの時代、すなわち中世は、大分県ではしばしば「大友時代」と呼ばれてきた（大分県出身の本論文の筆頭著者、牧純もそれに慣れている）。大友氏により確かな統治がなされながらも、しかし、この時代の文献は乏しく、極めて限られた知見からの想像となる。日名子文書によると、温泉奉行なども命名され、温泉場を修理・整備し薬師堂を興したといわれる⁵⁾。この方面の実証的研究はまだ乏しいとはいえ、大友家が温泉を重視していたのは確かなようである。すなわち天然の恵みを大切にする民間信仰がもともとあり、そのなかで湯治の慣習が支えられていった伝統的時代環境をも考える必要がある。

大友能直は源頼朝により守護に任命された後も京都にとどまり、鎌倉との往来はあっても、任地に実際赴任することはなかった模様である。しかし、大友氏第3代頼泰（頼康とも表記される（1222–1300））の時代になると、鎌倉幕府の実権が北条氏に移り、中央にはとどまりにくくなっていた時代環境の事情もあったのかもしれない。時は元寇の風雲急を告げようとする時代である。彼

はいよいよ豊後と博多に赴く。そして、九州防衛のため粉骨碎身することになる。すなわち1274年の蒙古襲来（文永の役）の際に彼は、実際に諸武士を率いて、筑前博多で蒙古軍と戦い、1275年秋の3ヶ月間は、彼の指揮のもと豊後国の御家人たちは博多湾を防備し、1276年には博多湾沿岸（香椎前浜）に石築地を築く作業を担当した⁴⁾。ほぼ同じ頃、頼泰は大隅国から豊後国に入ったとされる一遍上人に帰依した^{4,12)} こともあり、別府の温泉が大切にされたことであろうと推論される。

統治者に認められた上人が伝授した温泉健康法は、地元住民の支持基盤と相俟って益々定評あるものとなっていったことであろう。以上のように、大友頼泰（1222－1300）を始めとして、その子息貞親や一族、豊後の地頭・御家人たちが奮戦し元寇対策に尽力した。文永の役（1274）の防戦で傷ついた武将たちの療養に、別府の温泉が役立ったようである。これは別府市立美術館の郷土史関係の“別府歴史年表”で伝説として示されている。伝説ではあるが、又これに関する確かな史料に接していないが、時代を考慮しても、頼泰氏の政治上の立場からしても、十分にありえたことと推測される。すなわち元寇攻防戦で身と心の傷ついた武士たちが博多から豊後に戻り（勿論重傷を負った武士には困難であるが）、別府温泉で戦傷を養っていたことが容易に想像される。博多湾での石築地の作業による疲れを別府の温泉で癒すような単に湯治に過ぎないようなことであっても、意義あるものであったに違いない。もし想像が許されれば、今で言うリハビリテーション的利用もあったかもしれない。元寇攻防戦で奮戦した武士たちが豊後に凱旋し、心身の傷を養う必要から、別府温泉の需要はおのずと高まった時期があったのではないだろうか。これらの当否に関しては今後のテーマとしたいが、下記の古代と近現代に関する内容はそれを支えるものであろう。別府市立美術館が示す郷土関係の『別府歴史年表』によると、このころ重源（1121－1206）が寺社湯場を庶民に開放し、入湯の習慣が始まったとあるが、この史的事実については今後検討したい。

古代では、前述のように、傷ついた鹿や鶴が温泉で傷を癒している姿が目撃

されたとの伝説が全国いろいろな温泉地で聞かれる。或いはそれが温泉の発見につながったという話は現代の我々がよく耳にするところである。それと同じように傷ついた武士が別府温泉で療養したとなれば、それはとりもおさず、温泉の医療的利用である。

もうひとつは、時代を全く異にした遙か後世のことになるが、別府の温泉は外科的な療養にも向いていたようである。例えば、明治維新直後の西南の役や第二次世界大戦の時代、別府温泉は傷病兵たちを大いに癒す場となった⁹⁾。別府は同大戦終了まで空襲を受けていなかったことも幸いしたであろう。太平洋戦争前のことではあるが、1936年、別府鉄輪で発行されたパンフレットには風呂上りに涼む男性と6本ほどの松葉杖が描かれている⁹⁾。これは鉄輪温泉が怪我の治療やリハビリテーションの場にもなっていたことを示唆する大変貴重な史料である。

(2) 戦国大名、大友宗麟の時代

13世紀以来、大友家は多かれ少なかれ、別府の温泉を心身の療養などに活用したと想像されるが、史料に乏しい。大分市に関しては第二次大戦末期に繰り返し激しい空襲に見舞われているので、あまり期待が持てないかもしれないが、周辺地域などで文献等の発掘が進めば、戦国時代の豊後や九州の戦場で刀傷などを負ったツワモノたちの別府温泉利用が明らかになるかもしれない。

戦国大名、例えば16世紀に活躍した有名な大名たちに関する事柄で、我々は巷間流布している逸話を耳にすることがある。川中島の合戦で上杉謙信(1530-1578)による刀傷を負った武田信玄(1521-1573)は甲斐国の南部地方に位置する下部温泉のある“隠し湯”で療養したという。そのことは、パソコンのネットに検索ワードとして「武田信玄・下部温泉」を入れることでも容易に示されるところではある。このような「温泉療法」が豊後の国でも行われたとしても不思議でない気がする。

しかしこれまでのところ、本論文の筆者らは、甲斐と豊後の類似性の確実な

事例を見出すに至っていない。今後文献の渉猟が徹底するにつれ、新たな研究の展開があるかもしれない。16世紀のはほぼ同じ時期に盛名を馳せた2人の戦国大名、武田信玄（1521－1573）と大友宗麟（1530－1587）は、筆者らの知る限り、地理的に遠く離れており、互いに全く面識がない。しかし、彼らが実施したかもしれない、高度に経験的な「温泉療法」が甲斐と豊後の国における「軍陣医学」領域での研究対象に進展する可能性が残されていると思われる。

別府中世（16世紀）の温泉による療養は、ある種のお家騒動との関連で比較的良好に知られている。1550年、第20代大友義鑑が家臣に襲われ横死した事件、所謂「大友家二階崩れの変」の時、第21代大友義鎮（宗麟）は別府の浜脇温泉で湯治していたとされることである^{9,10)} このことは筑前琵琶で語り継がれていることのように²⁰⁾ これは『大友家文書録』に記載されていることが『大分県の地名』¹²⁾ でわかるが、『大友家文書録』には今回当たっていない。

戦国大名であった大友義鎮がどの程度積極的に別府の温泉を活用していたかの詳細は不明なので、今後の研究に俟ちたい。大分と別府の間は、当時別府湾を船で移動した場合の距離なら、陸路よりも遥かに短く時間も要さなかった。彼らがどの程度の頻度で別府の温泉を訪れたかは興味あるテーマである。いずれにせよ、別府温泉は大友家に馴染みのあるものであったことが想像される。

16世紀後半の大友義鎮に関する時系列的な検討を行ったところ、残念ながら、現段階では温泉との関係があまり出て来ない。しかし、以下のような事蹟の記載は大切かと思われる。

1557年、豊後国（大分県）の府内（大分市）で天主教（ここでは旧教ジェズイット派）のポルトガル人アルメイダ Luis Almeida は大友義鎮の庇護のもとに、日本で初めて西洋式病院を開設した^{14,15)} 彼は多数の外科手術を行ったが、内科は日本人の天主教徒が担当した¹⁴⁾ この内科・外科の治療のために、もしも別府温泉が利用されていたなら、おそらく13世紀以来ないしはほぼ300年ぶりの画期的なことであったであろうが、可能性があるとすれば、大友義鎮が利用していた別府浜脇の温泉利用であろう。府内（現大分市）から海路で別府

浜脇の温泉場にたどり着いてから、鉄輪はさらに遠く、今度は陸路の長い坂道を移動せねばならない。おそらく一遍上人のように、当時の人々は、船でさらに北上し、現在の上人が浜で下船するルートで鉄輪にたどり着いたのであろう。いずれにせよ、かなりの時間を要する行程である。しかも、別府鉄輪の「石蒸し風呂」をアルメイダの病院からの患者が利用すること自体極めて、考えにくい。なぜなら天主教徒の患者が鎌倉新仏教（時宗）管轄の施設を用いることはなかったと推論するのが普通ではないだろうか。

1562年、九州に覇を唱えた地元の太友義鎮は入道し、太友宗麟と称するようになる⁴⁾。

1578年、その宗麟が、今度はキリスト教に改宗しドン・フランシスコ Don Francisco と名乗る。本人にとっても劇的な変貌を遂げた時期であった。数々のキリスト文化の花咲く豊後の戦国大名ドン・フランシスコは仏教を支持する者でなくなったことも明らかだ。前後関係はわからないが、豊後国内の多くの寺社同様、別府鉄輪にある「永福寺」も焼き払われた¹²⁾。

しかし、温泉療法は生活の中に習慣として組み込まれたものになっていたであろう。そのような時代環境を経ながらも地域住民、温泉支持者たちの篤い



写真 2

別府鉄輪にある時宗の永福寺。

信奉を受けていた「時宗」は続いた。別府鉄輪の「永福寺」(写真2)は、紆余曲折を経ながらも、大分県に残るただひとつの「時宗」の寺である⁴⁾。すなわち温泉山「永福寺」は、明治維新後一時廃寺の憂き目に遭いながらも、尾道の西郷寺末からの寺号を受けて、この寺名となった^{9,12)}。

上人の徳を偲ぶ行事「湯浴み(ゆあみ)祭り」は上述のように、現在毎年行われている⁹⁾。上人の「見聞」「経験」に基づいた鉄輪の温泉開発は言うまでもなく、画期的なことである。

(3) 守護大名家終焉の第22代

別府温泉は鶴見岳(活火山)の火山活動による産物である⁹⁾。この温泉の地では太古の昔より地殻変動が激しかった。別府は、他の要因によるものも含め、多種多様の災害に見舞われてきた。地形の大変化もきたした。確かに、背後に山岳地帯をひかえる大分県は九州の他県と比べ、台風の被害は比較的小さいとされる。しかし、背後の山々から流れ出る河川の勾配が急で、以前は治水対策がままならず、台風の被害も甚大であった。

近世においては、戦乱に明け暮れた時代も終わりに近づきつつあった16世紀末、大災害が相次いだ。今日、晴れた日に鶴見岳山頂から眺望する別府湾は鏡のようである。その別府湾に浮かんでいた砂地のかなり広い陸地がある時沈んだ。「沖の浜」と呼ばれていた島状部分などが短時日にして海に没したと伝えられる^{4,8,9)}。最近の水中考古学や地形学などの研究によると、1596年の「慶長の大地震」で瓜生島(「沖の浜」の別名)が、そして1598年には大雨による土石流で久米島が、別府湾の海面下に没したという伝承が支持されている^{8,9)}。

中央の関が原の戦い(1600年9月)と同じ時期、九州で西軍側についた第22代大友義統(第21代宗麟の子)は東軍側の黒田如水との戦いに大敗を喫した。これは、「石垣原合戦」又は「九州(または西)の関が原合戦」と呼ばれている。その激しい戦闘ぶりは別府市石垣原に偲ばれる。その敗戦により、別府湾に浮かぶ陸地が大地震等により海中に没したことに、まるで追い討ちをか

けるかのように、400年間の長きにわたって豊後の地に君臨してきた守護大名家再興にかけた一縷の望みも空しく「没」となった。まさに“激震”の5年間であった。その後の大友家は、徳川家を中心とした時代の計らいあつてのことか、義鎮の孫(義統の子)である義乗の代よりいくさとは無縁の家系となった。江戸幕府の大切な儀式・典礼などを司る家系である高家としての命脈がしばらく保たれた¹¹⁾。

そして時は、温泉利用にも大きな変化が見られる時代、新たな“平和”を謳歌する所謂“鎖国の時代”へと推移するのである。日本の温泉は既に江戸時代、健康管理目的で利用されていたといわれる¹⁷⁾。江戸時代の湯治は現代的温泉療法の原型ともいうべきもので、農民・漁民には仕事の閑期に滞在型の湯治をとおして心身の疲れを癒し、次の仕事へ充電する習慣があつた¹⁸⁾。

しかし、別府ではその遙か以前から、少なくとも既に鎌倉時代には、健康増進・医療の目的で温泉入浴が推進されていた。このことは史的に更に注目されて然るべきと思われる。江戸時代の別府温泉は、感染症・皮膚病の予防・治療目的でも高い価値があつた(投稿準備中)。日常の経験に基づいた優れたものであつた。しかしこの温泉医療も亦、「経験医療」の域を脱していなかったのは事実である。

全国各地の温泉地で温泉健康利用の定着が認められるとされる江戸時代に、初めはささやかな支流ながら、長崎の出島を通して温泉科学に革命的な影響を直截及ぼす「化学」が流れ込んできた。温泉成分の解析に、近代のサイエンスの要素が芽生えたのは蘭学を修めた宇田川榕菴(ようあん)の時代からであるといわれる^{16, 17)}。

別府温泉におけるそれらの詳細は現在考究中であるが、真に科学的な温泉医療の開始は明治維新後の文明開化に待たねばならなかったであろう。近々その方面の研究を本格化させる予定である。全国に知れ渡ったベルツの功績とその卓見¹⁷⁾九州大学温泉医学研究所の貢献など途轍もなく大きな潮流を見てゆかねばならない。

Ⅲ. 考察と結語―「経験」の累積が加わった温泉の医療利用

以上、鎌倉新仏教（時宗）の「布教」と大友家「統治」の2点を中心として、江戸時代に入る前の中世における別府鉄輪地域などの温泉誌を考究した。江戸時代の温泉利用のように、長年の「経験」に基づいた有効な温泉利用の医療が確立されるまではどのような時代であり、如何なる状況であったのであろうか。現在も調査検討を継続している古代の自然発生的信心ないし薬師如来への崇拜に、新たに一遍上人により伝播した仏教の「布教活動」と「経験と見聞」の要素が加わり、併存していた時代ではなかったかと思われる。いわゆる「大友時代」の温泉利用はそのような発展段階にあったのではないか。「経験」に基づく医療的な温泉利用開始の時代は、少なくとも一遍上人が人々を啓発した事績まで遡ることができると考えられた。なぜなら瀬戸内地方での見聞と経験が蒸し風呂（写真1は現在の外からの様子）に生かされている。しかし石風呂利用が入浴健康法とどのようにリンクしているのかは不明である。石風呂で多量に発汗した後、瀬戸内海なら海水で、別府鉄輪では温泉の湯で洗い流したことが健康入浴であったかもしれない。いや、寧ろ別府鉄輪では、もともと日常行われていた入浴習慣に石風呂の手法が導入されたのであろう。詳細は今後の検討に俟ちたい。少なくとも認められることは“医療”に「経験」の要素が確実に加わったことである。別府における他の地区の温泉についても検討せねばならない。

別府温泉に関する薬学史においても、時代的な重なり合いがあるにせよ、自然発生的な「信心」、薬師如来などの「信仰」、瀬戸内西部地方の「経験」の導入、西洋の合理的な学問が移入された「科学」といった緩やかな発展段階が認められると考えられる。別府温泉の医療利用は古代においては「信心」や「信仰」のみであるが、中世には前者に新興仏教の布教活動を通じた「経験」の要素が加わった。現代はそれらを残しながらも「科学（化学）」の占める割合が最も大きいのは言うまでもない。この順で医療薬学の発展段階を唱えた説、薬学史一般の展開に関する仮説^{13, 19)} が当てはまる1つの例として、鉄輪地区など

別府地域の温泉に関する医療利用史と健康温泉誌は注目に値すると判断されよう。「科学（なかでも化学）」導入以前の「信仰」や「経験」がどのようなものであったかにも関心が及んで、今回の研究の推進方向となった。最後に温泉の医療利用の可能性ある発展段階を整理して記す。

第1段階：古代－「信心と民間信仰」中心であり、温泉薬師如来が尊ばれた。温泉の日常的利用が始まる。そのひとつとして、病氣治療、健康増進のための温泉に注目したい。温泉は太古の昔より、何となく薬の効果があるものとされてきた。迷信をも伴った可能性はあるが、傷ついた野生の鳥類や哺乳類の温泉利用を里人たちが目撃したことがきっかけで、すなわち「信心」の世界で関心がもたれるものであった。これは最近刊行の論文で注目していたところである¹⁹⁾

第2段階：中世－蓄積された「経験と見聞」の要素が加わる（本論文）。瀬戸内海沿岸地域の住民の生活体験が元となり、別府鉄輪地区に伝えられていることが本論文に引用された。信仰の世界のこととはいえ、価値ある経験が一遍上人によりもたらされたのである。守護大名、戦国大名たちの戦と温泉治療・療養の関係は、「経験」をもとにしたものがあると想像されるが、残念ながら研究は殆どなされていない。

第3段階：近現代－「科学と化学」の要素の占める割合が極めて大きくなる（現在研究中）と纏められると予想される。現代は温泉による「科学的」な健康増進や医療効果が当然のように支持されている¹⁸⁾

謝 辞 松山大学薬学部医療薬学科感染症学研究室に配属の学生たちの協力に感謝する。

引用文献

- 1) ルチャーノ・ステルペローネ著 (小川熙訳, 福田真人・医学史監修)『医学の歴史』原書房, 東京, (2009)
- 2) Ethel Tiersky and Martin Tiersky: “The Language of Medicine in English”, Prentice Hall Regents, Englewood Cliffs, New Jersey, (1992)
- 3) M. A. Huffman and M. Seifu: Observations on the illness and consumption of a possibly medicinal plant, *Vernonia amygdalina* (Del.), by a wild chimpanzee in the Mahale Mountains National Park, Tanzania, *Primates* 30 (1): 51-63, (1989)
- 4) 大分県高等学校教育研究会地理歴史科・公民科部会 (同社会部会) 編『大分県の歴史散歩』山川出版 (東京), (2008, 1993)
- 5) 日名子文書 (原典調査中, 下記 10)『別府温泉史』30-31 頁に若干の記述あり)
- 6) 愛媛県高等学校教育研究会地理歴史・公民部会編:『愛媛県の歴史散歩』山川出版 (東京), (2006)
- 7) 山口県歴史散歩編修委員会編:『山口県の歴史散歩』, 山川出版 (東京), (2006)
- 8) 豊田寛三, 後藤宗俊, 飯沼賢司, 末廣利人:『大分県の歴史』山川出版 (東京), (1997)
- 9) 市史編纂事務局企画:『別府市誌』日新印刷株式会社 (別府市) 編集・制作, (2003)
- 10) 別府市観光協会編著:『別府温泉史』教育図書出版, いずみ書房 (東京), (1963)
- 11) 佐藤満洋:「宗麟の孫の墓」大分合同新聞 2010 年 1 月 26 日 (火曜日) 朝刊第 12 面記事, (2010)
- 12) 平凡社地方資料センター編集:『大分県の地名』(日本歴史地名体系 45, 初版代 1 刷, 平凡社 (東京), (1995)
- 13) 牧純, 関谷洋志, 西岡麗奈, 玉井栄治:松山大学薬学部医療薬学科における薬学史教育事始, 日本薬史学会平成 20 年会講演要旨集 p. 14, (2008)
- 14) 小川鼎三:『医学の歴史』中公新書, 中央公論新社 (東京), (1964)
- 15) 山川浩司:『国際薬学史』南江堂 (東京), (2000)
- 16) 大沢真澄:江戸時代, 温泉水の化学分析の進展について, 日本医史学雑誌 143, 55 (2), (2009)
- 17) 松田忠徳:『江戸の温泉学』, 新潮選書 (東京), (2007)
- 18) 阿岸祐幸:『温泉と健康』, 岩波新書 (東京), (2009)
- 19) 牧純, 増野仁, 郡司良夫, 坂上宏, 桑田正広, 西岡麗奈, 関谷洋志, 玉井栄治:薬学史の時代区分に関する研究⁽¹⁾「信心」と「信仰」による別府温泉利用の古代医療誌を通した史的考究, 松山大学論文集, 22 (5), 1-15, (2010)
- 20) 杉山博:『戦国大名』日本の歴史第 11 巻, 中央公論社 (東京), (1965)
- 21) 黒田俊雄:『蒙古襲来』日本の歴史第 8 巻, 中央公論社 (東京), (1965)
- 22) 渡辺照宏:『日本の仏教』岩波新書, 岩波書店 (東京), (1970)